

# 序

研修医にとってありふれた疾患 (common diseases) を自分自身で管理することは思いのほか難しいものです。しかし common diseases が診られないならば稀な疾患を診ることはより難しいでしょうし、重篤な疾患を「ちゃんと」診ることもできないでしょう。一方、common diseases の管理がしっかりとできるならば、稀な疾患や重篤な疾患に対しても応用がききます。少なくとも大きくズレた管理をすることはないでしょう。研修医にとって common diseases を制することは登竜門でもあり、避けてはならない道でもあるのです。

それでは、なぜ研修医にとって common diseases の管理が難しいのでしょうか？ それには豊富すぎる3つのものが関係しています。

1つ目は情報が豊富であることです。common diseases に関する論文数は膨大なため、正しい医学知識を検索しようとしてもすべての論文に目を通すわけにはいきません。一部の講演会やガイドラインは利益相反の問題で過信してはいけません。現時点では UpToDate<sup>®</sup> など信頼性のある二次文献を参考にするのが最も効率がよい方法でしょう。しかしそれでも膨大な情報量があるため研修医にとって使いやすいとはいえません。

2つ目は選択肢が豊富であることです。多くの医療にまつわる問題は立場・解釈・経験・資源の違いから正解は1つではありません。そのためときとして指導医によっても意見が異なり、研修医は何が正しいのかわからなくなってしまうのです。common diseases に対する治療では同効薬剤の種類が多いのも研修医の悩みの種となっています。本書では可能な限りクリアカットにこの問題に切り込むことをめざしました。

3つ目は研修医がしなければならないことが豊富すぎることです。医学の進歩により疾患概念が増え、検査方法が増え、治療選択肢も増えました。大枠を十分に理解しないままに研修をしてしまうと、断片的知識でわかった気になってしまいます。優先順位を付け適切な取舍選択をすることができずに、マシンガンのように大量の検査や処方を行うことが起こりえます。これは忌々しき事態ですが、残念ながら稀な現象ではありません。また目新しいものや大がかりな検査、高額な薬剤が有用であると思込みやすいというバイアスもよく知られています。これらの落とし穴から研修医を救うべく、common diseases に対する common practices を中心に知識を深めることを本書の目標としています。

世のなかには数多くの書籍がありますが、本書は後期研修医が中心に執筆している点の特徴です。もちろん小生が全面的に監修を行ったとはいえ、この書籍をつくり上げた

のは彼らの熱い想いです。若手医師自身が初期研修医のときに悩んだこと、そして現在悩んでいることに関して論文を調べ上げ解説しています。このことにより研修医の皆さんが本当にベッドサイドで疑問に思っていることをスッキリと解決してくれるような書籍に仕上がったと思っています。本書を手にとっていただくことで日々の疑問点を解決し common diseases を自信をもって管理できるようになっていただけたならば、編集者としては望外の喜びです。

2018年7月吉日

洛和会丸太町病院 救急・総合診療科  
上田剛士